

星の時間（心の中に花を咲かそう！）

記：田中康典

2020年2月18日

2月11日に西穂高から帰宅した夜に知人から、作家の田渕義雄さんが1月30日に76歳で亡くなったと聞かされる。根強い読者に支えられ幅広く人気を博していた。ぼくもその一人だ。愛する土地で、愛する家で、愛する奥さまに見送られたと聞きました。ご冥福をお祈りいたします。

もう20年以上前になるが彼の愛犬ジローが存命の頃、小川山・マラ岩で一緒にクライミングを楽しんだり、薪ストーブのある彼の居間でコーヒーを頂いたり、住まいのガーデンンプしながら BBQ も。またそのガーデン前にある別棟の小さな小屋に泊めてもらい小川山の岩場まで通ったりしました。夜には奥さまから、ご自宅に招かれてワインを飲みながら食事までご馳走になったこともあります。そして取材の案内役を仰せつかり同行したことも今では懐かしい思い出です。あとには彼の著作18冊と彼自作の木製プレート(裏には彼の署名が入っている)が残った。



ぼくも来年の2月には70歳を迎える。いつ、お呼びの声がかかっても不思議ではない。そんな中、Tさんから自己紹介を兼ねて『なため』No.108に何枚でもいいから書いてみないかとお声がかかった。黄泉の国からでなくて安堵しました。不届きな発言！Tさん、ごめんなさい。お許しあれ！

ぼくの人生は大半が山に彩られている。入学後、大学紛争が激しく休講が多かった。教養科目は試験もなく大方がレポートで単位を取得していた。それでも専門科目は大変厳しく、当時は留年制度が敷かれており、その頃、専門科目にもあまり身が入らず4回生に上がる時に落第してしまった。実は2回生の時にワンダーフォーゲル部に入部したが飽き足らず、体育会山岳部に入り直し合宿や個人山行で年に200日あまり入山していたのである。そこで急遽、転部試験を受けて経済学部2年生に滑り込んだ。その時はこれで安心してまた、山へ行けると喜んでいたので、いい気なものである。都合、大学には6年間在籍したことになる。学生時代にはヨーロッパアルプスへも出かけました。

大学山岳部での夏山合宿は1ヶ月というものであった。荷物の重量は60kgを超えていた。大学から最寄りの駅まで5kmほどであったが、新人はみな駅まで辿り着くまでにバテてしまっていた。今となっては、現在の若い人たちには想像すらできないと思います。あの頃はみんなバカの集まりでした。

バカでも山岳部には読書家の先輩や登山の道具や考え方も時代の先端を行く同期もいた。でも中には最初の夏山合宿の初日でリタイアして退部する人間もいました。ぼくも合宿から逃げ出したいと思うこともありましたが。苦しい1ヶ月の夏山合宿を乗り切ると、ぼくたちは一回りも二回りも成長してい

た。青鬼と呼ばれたリーダーもぼくらが上級生になると、温かく見守ってくれた。その青鬼も2年前のネパール・カトマンズ近郊でのヘリ墜落事故で不帰の人となってしまった。自宅に安置された、ご遺体のお顔を拝見して奥さまにお悔やみの言葉を述べるのが精一杯であった。同期の先輩たちも、お通夜と葬儀には駆けつけていた。あれほどの苦しい体験と素晴らしい時間を共にした仲間である。自分の人生を思い返しても、あれほどのハチャメチャなことは2度とできないだろう。いま生きているのが不思議なくらいなのである。

就職試験では、日本郵船に合格した。しかしながら、本命の JETRO(日本貿易振興会)の最終選考の3次試験で落ちてしまった。落ちた理由は簡単である。外国人の面接官に赤坂離宮はどこにあるかと聞かれ、それは京都であると答えてしまったのである。バカはやはりバカであった。

地元の会社に就職しても山は続けた。劔岳・劔尾根2峰南壁に新ルートの開拓、新穂高から入山して滝谷入り口から滝谷四尾根をソロ・クライミング、黒部奥鐘山西壁 OOC ルート第10登、冬に屏風岩～前穂東壁～滝谷継続も。

そのうちに結婚して2人の娘に恵まれた。そんな中、短時間で楽しめるパラグライダーにのめりこんでしまった。白山と立山の山頂からの山岳フライトにも成功した。それが昂じてパラグライダー・スポットのある獅子吼の麓に家を建てた。それもどうせならとログハウスを。冬になればストーブに薪をくべながら炎を眺めて喜んでいた。ここまでは、まだ良かったのである。



ところが、子どもたちが高2、中2となり大切な受験時期に差し掛かった頃、即ち2000年9月に役員を辞して退社するという大きな決断を下す。50歳という年齢になり、いつ死ぬかもしれないと思った。今こそ、山岳ガイドを目指してみたいという内なる声に耳を傾けることが大切なのではないかと自問自答した。大学山岳部時代にその萌芽はあったと思いますが封印していた。『きっと後悔する。それでいいのか。自分の心をしっかり見つめ、あてはなくても、一步踏み出すことが必要ではないか』ということではなかったかと思います。住宅ローンは？子どもたちの教育費は？家族の生活は？それでも、妻はぼくの気持ちを尊重してくれた。頭が上がりなくなった理由である。

あとさきを考えずに退職してしまったのである。常人の沙汰ではない。幸運なことに1ヶ月も経たないうちに、東京の出版社の総務部長から電話がかかってきたのである。ぼくの退社を人づてに聞いたらしい。そこで、当社へ来ないかと誘われたのである。嘘みたいな話であるが、これは本当です。

1982年、元カネボウのデザイナーであった中林基(おさむ)さんという ALS(筋萎縮性側索硬化症)患者の画文集『生命の像』出版記念の展覧会を金沢で開くので、プロデュースをぼくに依頼してきたのが当時、広報の課長だった、その人であった。それを受けて、2人で一緒に金沢市内の新聞社、ラ

ジオ局、テレビ局すべてを訪問して取材依頼をお願いして回ったという間柄の人でありました。中林基さんからは人間の限りない可能性を学びました。その展覧会が成功したのは言うまでもありません。

その電話で立場をわきまえずに、偉そうにこう言ったのである。ぼくは山岳ガイドを目指しており、その研修は毎月1回、2泊3日で開催されます。そのたびに休まなければいけません。それでもよろしいでしょうか？と。そしたら、それでもいいから当社へ来てくれとおっしゃるので、ぼくとしては渡りに船とばかりに入社させて頂くことになったのです。

画文集『生命の像』が取り持った縁で、**ぼくの運命は大きく開けたのである**。20年近くの時を経ての僥倖に感謝してぼくは今でも、その画文集を大切に保管している。今ではその総務部長は、フリーライミングに夢中なのだから人生って不思議なものですね。



2003年からセブン・サミツのプロジェクトを開始。その前年には、とりあえずマウンテン・ガイドの資格を取得していた。まず手始めに南米大陸最高峰・アコンカグア 6,960m を登るために約1ヶ月の休暇を取得しました。入社してまだ3年足らずで、本性を現した訳である。でも、その頃にはぼくの活動に対して社長、役員の方々が応援してくれるようになりました。もちろん、ぼくの仕事ぶりを見ての応援である。こんなバカでも、やる時はやるのである。

仕事に講演会、そして2004年から2005年にかけての2年間は石川県立総合看護専門学校で『生命倫理』の非常勤講師を務める。セブンサミツ・プロジェクトが進み難くなり辞退させて頂く。

2008年から2019年まではFM ラジオ局で1時間の生放送番組『山、自然そして命を考える』のパーソナリティを11年間、務めさせて頂きました。素晴らしい経験となりました。

その間の132回でオンエアした曲は500曲を超えて、ぼくを大きく成長させてくれました。2009年のチョモランマと南極は録音で乗り切りました。この年には1年の半分くらいは休暇を取得できたお蔭でセブン・サミツを達成できました。

この FM ラジオ放送では、第2回開高健ノンフィクション賞受賞作『ウーマン アローン』廣川まさき女史、同じく第9回開高健ノンフィクション賞最終選考までノミネートされた『女ノマド、一人砂漠に生きる』常見藤代女史のお二人にもスタジオで生出演して頂きました。

今でも彼女たちとは交友が続いています。素晴らしいゲストたちに会えたことは、ぼくにとって大きな財産となりました。この1時間の生



(FM ラジオ局での放送風景)

放送番組は毎回、構成から選曲、ゲストの出演交渉までぼくが一人でこなしていました。大変でしたが、得がたい経験でした。そして、これらの活動はすべて会社公認の勤務時間として扱われました。

ひと様に言えることがあるとすれば、出版社の正社員として勤務しながら山岳ガイドの資格を取得し、文字通り7年かけて幸いにもセブン・サミッツの登頂を果たすことができたということです。詳細は後述のぼくの年譜をご覧ください。しかしながら、それらはすべて過去のことです。ぼくは今、これから何ができるかを模索しながら前を見て、山に向き合っていきたいと考えています。

さて表題の『星の時間』ですが、この言葉を造語したのはオーストリアの作家、シュテファン・ツヴァイクです。彼はその中で次のように書いています。

時間を超えてつづく決定が、或る一定の日付の中に、或るひとときの中に、しばしばただ1分間だけの中に圧縮されるそんな劇的な緊密の時間、運命を孕むそんな時間は、個人の一生の中でも歴史の経路の中でも稀にしかない。こんな星の時間・・・私がそう名づけるのは、そんな時間は星のように光を放ってそして不易に、無常変転の闇の上に照るからである。

— 『人類の星の時間』片山敏彦訳、みすず書房 —

そんなに難しく考えることは必要ないと思います。ぼくの勝手な解釈ですが『星の時間』とは、わかりやすく言うと心の中に花を咲かせるということではないでしょうか？

簡単なことではないかもしれませんが、誰にでも心の中に一生に1回くらいは花を咲かせることができるとぼくは信じています。そして、ぼくもいつの日にか、心の中に花を咲かせてみたいと強く願っています。



セブン・サミッツの頂上の石で焼いたぐい呑みと皿(7枚)

昨年12月からトレーニング・ジム通いを始め、トレーナーの方にプログラムを作成して頂きました。ストレッチ、筋力アップに、もともと強度の高いAMTというマシンで30分走るというより階段を登る感覚。約1時間30分のプログラムを週3回のペースで励んでいます。来年の夏には、いまの自分としてはビッグ・チャレンジなるものを目指しています。山を登り始めて50年(ブルーベルも50年)、ガイド資格を取得目指してから20年の節目になります。

人生は一つではない、生きることは一度ではない。

ブルーベルには素晴らしい先輩方がたくさん、いらっしやいます。NAさんの山に対する、ひたむきさ、IAさんの実力もさることながら、日々のトレーニングの努力、Nさんのひとを包み込むような包容力

とどれをとっても素晴らしいと思います。このお三方をはじめとして先輩の皆々様そして会員の皆々様に敬意を表せずにはいられません。今後とも、ご指導お願い申し上げます。

追記：

実は、ぼくには10,000冊を超える蔵書がありました。高校までは読書とは縁遠いところで、ぼんやりと過ごしていたのですが大学時代の同級生が山好きで、登山の楽しさを教えてもらいました。東京の進学校出身の彼はまた読書家で、ぼくの知らない作家や山の本を数多く読んでいました。まさに大人と子ども。同じ年齢でこうも違うのかと、自分が恥ずかしくなったことを思い出します。彼からは多大な影響を受けました。ぼくの恩人の一人です。彼と出会わなければ、いまのぼくはありません。

その中でも『アルプ』という雑誌というよりは山の文学誌ともいべき存在を覚えてもらったことが、その後のぼくを大きく変えてくれました。1958年3月に創刊され、1983年2月で300号を迎え終刊となった。25年間で幕を閉じたのだが、ぼくの年齢で言えば7歳から32歳までにあたる。

山の雑誌だが山の案内はしない。コース紹介、技術や用具をめぐる実用記事といったものもない。広告は一切のせない。そんなつましく、ひっそりとした雑誌が300号も続いたことが稀有のことであった。編集の中心には串田孫一(1915～2005)がいた。大学教授、大学山岳部監督、哲学者、詩人、随想家、翻訳家、音楽家、画家……多彩な貌を持つ、一つの枠に収まらない人であった。『アルプ』から多くの人々が育っていった。辻まこと、畦地梅太郎、近藤信行、宇都宮貞子、大谷一良、青柳健など寄稿家は600人を超えた。

登山は登るという行為があってこそそのものですが、『アルプ』はぼくたちの住むところの、ほんの少し先にある、そんな未知に目をひらいてくれた。季節が変わると、風はつねに新しい世界の誕生を告げてくる。新しい精気と彩り輝く森や谷間や山里にしのび寄る。それを囁くように小さな声で教えてくれた。そこから、ぼくは多くの作家と邂逅して、多様な考えを知ったのである。

そんな訳で、増殖していった蔵書が10,000冊を超えたのですが、妻に背中を押されながら半分の5,000冊を処分しました。すでに残りの行き先は決めてあります。春になり煙突掃除を終えたら、庭先にBBQのできる炉台を作る予定です。3年前に、ある鉄道会社から譲り受けた立派な枕木7本を使って。出来上がったら、皆さまと一緒にBBQを楽しめたらと思っています。

その時は、ぜひ皆さま！ご参加ください。それともし、この炉台作りを一緒にやってみたいという奇特な方がいらっしゃいましたら、ぼくまでご連絡ください。大歓迎です！よろしくお願いします。

最後に今回、『なため』に書かせて頂くチャンスを頂きましたことに感謝いたします。これまでの歩みを振り返り、これから前を向いて行こうという契機となりました。Tさん、本当にありがとう！！

また、Iさんには拙文には1枚もなかった写真を入れて編集して頂き、お礼申し上げます。

●田中康典 年譜

ぼくのささやかな経験が皆さまのお役に立つこともあるかも知れないと思い、掲載させて頂きました。他意はございません。ぼくに尋ねてみたいことがありましたら、遠慮なくおっしゃってください。ぼくの知る限りのことは、お伝えします。それが、ぼくの役割だと認識しております。

*2000年 9月 山岳ガイド資格取得のため26年間勤務の出版関連会社役員を50歳で辞して退職。

*2000年10月 東京の教育系出版社に転職。山岳ガイド資格取得の準備を進める。

*2001年 5月 (社団法人)日本アルパイン・ガイド協会のアルパイン・ガイド養成学校へ入学

*2002年 4月 マウンテン・ガイド資格の取得(石川県で初めて)

*2003年 1月 ①南米大陸最高峰 アコンカグア(6,960m)登頂

*2003年 9月 中国・大娘姑山(5,025m)登頂

*2003年10月 中国・大雪塘峰(5,364m)登頂(第2登)

◆初登頂を逃すも未踏の氷壁ルートから成都の最高峰の第2登を果たす

*2004年 4月『アルパイン・ガイド』資格取得(日本アルパイン・ガイド協会)⇒後に『上級登攀ガイド』(日本山岳ガイド協会)へ呼称変更。さらに現在は『山岳ガイド・ステージⅡ』へと変更

*2004年 4月 石川県立総合看護専門学校で『生命倫理』の非常勤講師を務める。

*2004年 8月 ②ヨーロッパ大陸最高峰・エルブルース山(5,642m)登頂

8月 スイス・マッターホルン(4,478m)悪天候で敗退

11月 ③オーストラリア大陸最高峰・コジウスコ山登頂

*2005年 4月 石川県立総合看護専門学校で『生命倫理』の2年目の非常勤講師を務める。

5月 ④アフリカ大陸最高峰・キリマンジャロ山(5,896m)登頂

5月 アフリカ第2の高峰・ケニア山バティアン峰北壁(5,199m)敗退

◆北壁のファーマン・ルートから全29ピッチ中、26ピッチまで登るもアイス・ガリーに阻まれて登頂を逃す。アイゼンを小屋に忘れたのだ。今でも悔しい思いが残る！

*2006年 6月 ⑤北米大陸最高峰・デナリ(マッキンリー=6,194m)登頂

*2007年 6月 北京オリンピックの先乗り NHK ディレクターの誘いで中国・北京を訪れ万里の長城などを巡る。有名な北京ダックの高級店で、ご馳走になる。

*2007年 8月 日本アルパイン・ガイド協会から【かながわ山岳ガイド協会】へ移籍

*2008年 4月 地元の FM ラジオ局で【山、自然そして命を考える】という1時間の生放送番組のパーソナリティを開始する。毎月1回、第3木曜日の午後1時30分～2時30分。

*2009年 5月 ⑥アジア大陸最高峰・チョモランマ
(エベレスト=8848m)石川県人初の登頂

チョモランマのベースキャンプ入り直前
(後ろはチベット側から見たエベレスト)



*2009年12月 ⑦南極大陸最高峰・ヴィンソンマシフ(4897m)登頂

◆日本で20人目のセブン・サミッター(世界七大陸最高峰登頂者)。石川県人初。

*2011年 6月 シャモニーのフランス国立スキー登山学校 ENSA(フランスでは唯一の国家資格の山岳ガイド養成機関)にて山岳ガイド研修をモン・ブラン山群で受講する。

*2012年 8月 知床半島をシーカヤックで1周する(4泊5日)

*2015年 5月 韓国・インスボン(1枚岩の大岩壁)ヘクライミング

*2015年 8月 カナダ・スコーミッシュ(大岩壁)ヘクライミング

*2019年 1月 韓国へアイスクライミング

*2019年 3月 FM ラジオ【山、自然そして命を考える】という番組のパーソナリティを2008年4月17日より足かけ11年間務め、2019年3月21日の132回で終了した。

*2020年 2月 ボルネオのキナバル登山(ヴィアフェラータも)を予定するも、新型コロナウイルスの感染が拡大して2月25日にドタキャン。中止して延期しました。残念です。

この17年間で13回海外へ出かけ、23の国と地域を訪れる。アルゼンチン②、チリ、ペルー②、マチュピチュ、ティティカカ湖、ボリビア、アメリカ②、カナダ、アラスカ、チベット、タイ、インド、ネパール、UAE、ケニア、タンザニア、ロシア、フランス③、スイス③、パタゴニア、中国②、南極、韓国②

◎ 2014年12月末で、出版社を退職。現在は山岳ガイド(各種講習会含む)、講演会などを通して社会貢献に務めております。東日本大震災では、釜石のシーカヤック・スクール『MESA(めさ)』を支援しています。震災時には現地へも出かける。今も交流が続き、今年も出かける予定です。

◎ 現在は、NHK名古屋放送局制作・ウィークエンド中部の【ゆる山へGo!】という企画で北陸3県のガイド役を担当。すでに4回出演。次回は4月放送予定です。毎週土曜日の朝8:00~8:30 NHK 総合テレビで月1回のオンエアされるコーナーです。

【所属団体】

- 小松ブルーベル山岳会(石川県勤労者山岳連盟) 会員
- NPO かながわ山岳ガイド協会 会員
- 公益社団法人 日本山岳ガイド協会 会員
- 公益社団法人 日本山岳会石川支部 会員 (石川支部 技術担当委員)
- 金沢高尾城址見晴らし台愛好会(KTM) 会員

【保有資格】

- ◆山岳ガイド・ステージⅡ【上級登攀ガイド】(公益社団法人 日本山岳ガイド協会)
- ◆長野県認定・信州登山案内人(北アルプス、八ヶ岳)
- ◆パイロット 資格(社団法人 日本ハングライディング連盟)
- ◆上級救命講習 修了
- ◆Wilderness First Aid (WFA) ◆自然公園指導員(環境省)